

『生活文化研究所報告』第四十八号
二〇二二年三月刊 別刷

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（二二）

藺部 寿樹

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（二一）

菌部 寿樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（一三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』二一（明治書院、二〇〇四年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

○現代語訳（一）～（一八） 応永二三年～二八年（二四一六～二二）『米沢史学』三〇～三五号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇～五五号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二～四七号（二〇一四～二〇二〇年）

○現代語訳（一九） 応永二九年（二四三二）一月一日から四月三〇日 『米沢史学』三六号（二〇二〇年）

○現代語訳（二〇） 応永二九年五月一日から八月三〇日 『紀要』五六号（二〇二〇年）

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永二九年九月一日から一二月二九日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものは

ない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

【主要参考文献】

横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年）

位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）

小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七（明治書院、二〇〇二～二〇一四年）

村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考―」

（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）

村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考―」

（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）

植田真平・大澤泉「伏見宮貞成親王の周辺―『看聞日記』人名比定の再検討―」（『書陵部紀要』六六号、二〇一四年）

松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）

田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」（『中近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年）

松蘭斎『中世禁裏女房の研究』（思文閣出版、二〇一八年）

植田真平「伏見の侍―『看聞日記』人名小考―」（『書陵部紀要』七〇号、

二〇一九年)

(応永二十九年) 九月一日、小雨が降った。いつものように朔日のお祝いをした。今日は彼岸の初日なので、身を淨めた。

御香宮では、今夜、御旅所に御神輿をお迎えする。いつものようにその御神輿巡行を拝見しに行った。雨が降ってきたので、相撲は見物しなかつた。雨降りでもいつも通り相撲はあつたそうだ。

伏見荘・下三栖境相論の再燃

四日、晴。伏見荘と下三栖との境争いの件で、榎島の惣官が仲裁に入ってくれた。蔵光庵主が取り次ぎ役となつて決着したものである。

ところが伏見荘の村人たちが境目の地の草を刈つたという。それで三栖の住人たちが怒つて、また立ち上がつたらしい。今日か明日には伏見荘へ大勢を率いて攻め寄せることになつたそうだ。驚いた話だが、伏見荘の村人たちは応戦する準備をしているという。応戦の軍勢については、禪啓たちが取り計らつていろいろな所に誘いをかけているようだ。珍事である。

丹波国小河内別納三名

ところで庭田重有朝臣が支配している丹波国小河の内三名方は、以前から四条隆夏中将与領地争いになつてゐる。裁判の結果、この領地はとうとう隆夏のものにされてしまつた。小さな土地とはいつても、実効支配している領地が奪われてしまつたのは、困つたことだ。

野口五方のうち小河は庭田家が代々相続してきた領地である。ところが近頃、隆夏朝臣が支配しているので、何度も幕府へ訴えていた。それで裁判の結果、別納三名全体が敵方の隆夏に付けられてしまつた。無茶苦茶な判決であるが、どうしようもない。庭田家としては、かわいそくなことだ。

境争いの件で、田向経良が管領と山城国守護へ善処を申し入れる

五日、晴。明け方、田向前参議が京へ出かけた。田向に、畠山満家管領と京極高教山城国守護に対して、伏見荘と下三栖との境争いに関する詳しい事情を説明させるためである。夕方、京都の田向から手紙が届いた。

その手紙によると、田向はまず侍所長官を兼務している京極山城国守護に事情を説明したそうだ。それで急ぎ三栖に幕府の使者二人を送つて、攻撃することを止めるよう、守護にお願いした。また畠山管領にも、管領の家臣でもある榎島惣官支配下の三栖住人に対して、伏見荘への攻撃をやめるよう命令してほしいとお願いした。

いずれからも暴力行為はあつてはならないとの返事があつたそうだ。それでまずはめでたいと田向に返事した。

明日、訴状や証拠書類などを幕府の事務官にお送り下さいとも田向は言つてきた。田向前参議は今晚、京都に泊まるそうだ。

大風で伏見宮家の門が壊れる

六日、雨が降り大風が吹いて、あちらこちらで建物が吹き破られた。宮家御所の門なども風に壊された。

朝早く訴状などを京都にいる田向前参議宛てに送つた。また山城国守護に渡すための酒一献分の銭も送つた。

五条河原の大施餓鬼会

さて今日、賀茂川の五条河原で大施餓鬼が行われるはずだったが、この雨風で延期になつたそうだ。去年の飢饉や疫病で大勢の人が亡くなつた。その追善供養の施餓鬼を行うため、寄付を集めた僧たちがいたという。

死骸の骨で地藏菩薩像を造る

その僧たちは、往來を歩き回り寄付を集めてから、結果したそうだ。そして死骸の骨を集めて、地藏菩薩の像を六体造つた。また大きな石塔を建てた。その地藏像や石塔を供養するため、施餓鬼を行おうとしたそ

うだ。

これまでお経を読み、大勢が集まって見物席も作った。室町殿も見物なさる予定だったという。この施餓鬼は五山僧が勤仕することになつていたらしい。

下三栖に対する侍所の対応

夜になって田向前参議が帰ってきた。今朝、山城国守護の所へ行った。守護が返答することには、昨日、三栖へ幕府の使者二人を送って厳しく出撃を牽制したところ、村人たちは叛逆を企てるつもりはありませんと言いつつ、言い訳したという。しかしさらに厳しく処罰すると脅かしたところ、今となつては乱暴を働くつもりはありませんと、村人たちは返答したそう。田向前参議が一献分の銭を渡そうとしたところ、守護は固く辞退して受け取らなかったそう。

管領に対しては田向の家臣に訴状を持って行かせたところ、十二日のご裁判の日なので、その時に訴状をいただきたいと返答があつたそう。いずれにせよ、三栖の者たちが攻め寄せてこなくなったので、一安心である。

【頭書】（『日記の上方の隙間に書き加えた記事』後に聞いたところでは、侍所の二人の使者が三栖へ行つたところ、村人たちは恐怖の余り、色を失つたそう。伏見荘でも守備の軍勢を諸方から雇つたので、村人たちの出費も多かったという。

七日、晴。今日はお彼岸の最終日である。この七日間、身を淨めて写経をして、お経を読んだ。

比叡山が五山僧による施餓鬼勤仕に反対する

さて賀茂川河原の施餓鬼会であるが、勸進僧が主催して五山の僧衆が勤行するのはよくないことだと、比叡山が反対しているそう。室町殿も、ご見物するとは全く仰らなくなったよう。

勸進僧と河原者の喧嘩で、勸進僧が突き殺される

また寄付を集めた僧と河原者が喧嘩して、僧が二人突き殺されたという。施餓鬼の供物や道具も散々荒らされて、河原者たちが持ち去つたらしい。よほど分を越えた行為だったので、天魔が妨害したのかもしれない。昨日の大風大雨で施餓鬼の場も散々なことになつたという。

寄付によつて山のように集められたものは、京五山の各寺院へ移された。その寺々でそれぞれ施餓鬼を行うようにと、將軍からご命令があつたそう。すべて天狗の妨害によるものであろう。不思議なことだ。

八日、晴。御香宮御旅所にお参りした。

ところで森老尼が田向家に来て、芳徳庵の領地などについて、室町殿が領地支配の保証書を書いて下さつたと言つていたそう。去年、行蔵庵の訴訟により、芳徳庵の伏見荘内一か所の土地が没収された。これに對抗して、將軍の保証書を申請したのであろうか。不思議なことである。九日、晴。「重陽の節供で佳い時節だ。たいへん幸せだ」と予祝した。いつものように御節供のお祝いをした。正永が来た。

例年どおり、御香宮の祭祀を田向家へ行つて見物した。息子・娘・姪の鳴滝殿・松崖・宮家の女性たち皆で行つた。重有朝臣や正永らも連れて行つた。祭祀にはいつものような趣向がなかった。特に三献の酒宴をしただけで宮家へ戻つた。今年は忙しいのでお迎えできませんと数日前に田向家が申し入れてきたので、ただ一献分の酒宴だけを用意するように命じておいたのである。

山田宮、梅若一党の猿楽

夜、山田宮の猿楽を見に、指月庵へ行つた。見物席で猿楽を見た。松崖・鳴滝殿・上臈・宮家の男どもと共に見た。猿楽は二番演じられた。演じたのは梅若の一党だそう。

さていつものように今日から百日間、琵琶や和歌の練習を始めた。正永にも和歌を百首詠んで進上するように命じた。

十日、晴。獅子舞がやって来た。いつものように褒美を与えた。
法安寺猿楽

法安寺へ行き、猿楽を見物した。息子・鳴滝殿・松崖・上臈・二条殿・今参・塔頭御寮惠芳・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・正永・寿蔵主・具侍者・聖乗・稚児の本玖・梵祐らを連れて行った。田向一族の芝殿や山田香雲庵真幸房ら、大勢が来た。

地侍一族の法師が見物人に刃傷する

見物席で一献の酒宴をした。これは寺家が準備してくれたものである。三番目の猿楽の時に騒動が起こって、猿楽が中断した(※)。伏見荘地侍の一族である卿という法師が見物人に斬り付けたそう。会場がとて混乱したが、なんとかして事態を鎮めた。それでまた猿楽が一番演じられた。猿楽の役者に太刀一振りを褒美として与えた。猿楽四番が終わってから、帰った。帰る時分になって雨が降ってきたので、急いで戻った。その後、いつものように御香宮で猿楽があったそう。

※「中断した」：原文には「打ちさましおわりぬ」とある。

十一日、晴。正永が帰っていった。今夜の権現猿楽をお忍びで見物した。松崖・鳴滝殿・娘たち・東御方・上臈・田向前参議・重有・長資ら朝臣・慶寿丸・阿古丸・寿蔵主・聖乗・稚児の梵祐らを連れて行った。一献の酒宴を禅啓が勧めてくれた。猿楽四番が終わった。猿楽の役者に太刀を与えた。

十二日、雨が降った。田向前参議が京へ出ていった。三栖に関する訴状などを幕府の事務官に手渡した。

さて島田益直六条庁官が上皇御所の職員に任命された。それで石清水八幡宮御参詣のお供え物などに関する事務をとるよう命じられたという。

一条庁の資行に御参詣の事務をとるようにお命じになったところ、関係書類を持っていないので先例が分かりませんと言って、資行が断った

そう。それで室町殿のご命令によって、益直がこの役に任命されたと
 いう。

長年、宮家に仕えてきた者なので、この事を聞いてうれしかった。めでたいことである。一方、資行はたちまち経済的に苦しい状況に追い込まれ、かわいそうなことである。

十三日、晴。今夜の名月は清く明るい。いつものようにお月見をした。和歌の題を出した。しかし和歌の披露はできず、残念である。長資朝臣は、六条殿における上皇様のお給仕役を勤めに出ていった。

十四日、一日中、大雨だった。上皇様の石清水八幡宮御参詣の際に雨が降らないよう、聖護院に祈祷させることになったそう。聖護院は祈祷することを承知したという。

十五日、雨が止んだ。明日の明け方午前三時に室町殿が石清水八幡宮へお参りされるそう。もし遅参する者がいれば、待たずに出発するという。急いで出発するようにとのご命令だそう。

上皇様御参詣の行列を見物することを、宮家の皆が期待しているの
 で、秘かに計画をたてた。

承仕唯源が死ぬ

さて雑用法師の唯源が今夜死去した。長年宮家に仕えている者なので、かわいそうなことである。唯源は養父なので、明盛は喪中で自宅に籠もっているそう。

後小松上皇の石清水八幡宮参詣

十六日、天気は快晴である。今日は上皇様が石清水八幡宮へお参りする日である。午前五時、輿に乗って見物に出かけた。用健・松崖・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・寿蔵主・具侍者・聖乗・稚児の梵祐らを連れて行った。お供の者たちは徒歩である。鳥羽で見物した。

明るくなってから日が出る前に、室町殿は先にお宮へ向かった。行列の先頭は番頭が十余人、次に四方輿。これは灰色の狩衣を着た者たちが

昇いでいる。次に殿上人二人、木造持康中将与冷泉永豊侍従である。次に武家の者四〜五騎などである。特に着飾っている様子はない。

その後、日が出てから上皇様の御輿が通り過ぎた。上皇様は午前五時に出発なさったそうだ。御輿の前、先頭を殿上人十三人、次に各々灰色の狩衣に紅の衣を重ね着した公卿十一人である。その次に院庁の下級職員・北面の武士・近衛府の護衛官。そして上皇様の御輿。御輿を昇ぐ御力者法師は、所々の門跡から派遣された者だという。上皇様は灰色の御狩衣をお召しだった。その後ろに花山院持忠参議兼中将が騎乗している。次に上北面の武士二人、上位の護衛官二人も騎乗している。それ以外の者たちは徒歩であるが、長距離なので馬に乗ったりもしているようだ。お供の人々は特に着飾っているわけではないが、きれいな行列であった。

お供の人々

公卿

室町殿前内大臣は御簾役、広橋兼宣大納言、正親町三条公雅大納言、洞院満季大納言、正親町実秀権大納言、院執権の日野有光大納言、烏丸豊光中納言、裏松義資新中納言、勧修寺経興中納言、柳原行光新中納言、日野西盛光参議兼大弁は御沓役、花山院持忠参議兼中将は御太刀持ち役殿上人

松木宗継藏人頭兼中将、葉室宗豊藏人頭兼右大弁、山科教豊内蔵頭、白川雅兼神祇伯兼中将、飛鳥井雅永中将、西洞院時基朝臣、世尊寺行豊侍従、園基世少将、冷泉為之中将、事務取扱役の広橋宣光右中弁、一条公知少将、勧修寺経直権右少弁、鷲尾隆遠侍従

四位・五位の北面の武士

仲則、懐俊

六位の北面の武士

家国、源康基、同康久、藤原定衡、同久国、源康行

近衛府の護衛官

泰久武、同兼勝、同延有、同久忠、同久倫、同兼為、同吉久、下毛野武忠

上皇御所御庭雑用役

幸末佐、竜夜又、菊千代、光若、幸代、千代松、光鶴、菊松

上皇様守護の陰陽師

土御門有盛朝臣

西園寺実永前右大臣もお宮で合流する。八幡宮で行う役に着くそうだ。山上に上皇様の御宿となる黒木御所（※）が新築されている。そこで八幡宮長官である田中融清が一献のお酒を進上する。御引き出物としていろいろな重宝を上皇様に献上する。山下の御宿は極楽寺である。この極楽寺で室町殿が一献の酒宴を準備している。酒宴の事務担当者は裏松新中納言である。室町殿は御引き出物として御服十重・お盆・香箱・食籠（※）・御太刀を進上するそうだ。広橋大納言は急病になったので、お帰りの行列にはお供しないという。

また御帰りの行列を宮家の女性らが見物するそうだ。鳴滝殿・東御方・廊御方・上臈・二条殿・塔頭御寮恵芳・山田香雲庵真幸房・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・寿蔵主・梵祐・二人の女官らが見物した。日の入り時分に鳥羽を通り過ぎられたそうだ。室町殿には畠山満家管領以下諸大名が大勢お供した。その行列は、今朝から一番の見ものだったそうだ。管領の家臣が遺恨から殺し合う

ところで八幡宮に詰めている管領の手下である河内国の住人が、別の同国住人二人とかねてから互いに恨みを抱いていたそうだ。それで昨日、遊佐宿（※）でこの二人が刺し殺し合って、二人とも死んだという。また手助けに入ったもう一人も同じく刺し殺されていた。かれこれ三人が死ぬ騒動であった。しかしこれ以外の者は無事で平穏だったそうだ。

今夜、即成院の念仏会に参列した。鳴滝殿や宮家の女性たちや男ども

もいつものように参列した。

【頭書】石清水八幡宮社頭での儀式については何も聞いていないので、記さなかった。きつと立派な儀式があったことだろう。

※黒木御所（くろきごしよ）：皮を削っていない材木（黒木）で造られた天皇や上皇の御所。

※食籠（じきろう）：漆塗りで蓋付きの食器。

※遊佐宿：未詳。

栗打ち

十七日、雨が降った。暇だったので、栗打ちをして宮家の男どもと遊んだ。

芳徳庵へ領地を返せという命令書が届く

さて芳徳庵が訴えている領地のことであるが、芳徳庵へ領地を返しなさいという幕府の命令書が今日届いた。それで、以前の裁判で行蔵庵へ与えた関係書類も芳徳庵へ返すと返答した。

足利義持、伊勢神宮に参詣して称光天皇の病氣平癒を祈る

十八日、晴。室町殿が天皇陛下の病氣平癒のお祈りをするために、今日伊勢神宮に向かった。上皇様の代わりにお参りするそうだ。

上皇様へ、石清水八幡宮への参拝が無事終わったことをお祝いする手紙を差上げた。お返事は冷泉永基朝臣を通して下さった。

仁和寺御室永助法親王と妙法院主堯仁法親王が仙洞御所へお祝いに來て、一献のお酒を持参なさったそうだ。

野遊びでイグチを取る

十九日、晴。野遊びに出かけてキノコのイグチを取った。田向前参議・重有・長資ら朝臣・慶寿丸・梵祐を連れて行った。

禅照庵で蔭蔵主松崖と酒を飲む

帰りがけ、禅照庵に立ち寄った。ここに松崖がいらっしやるので、小さな酒樽を持参した。そしてここでイグチを味わった。禅照庵主がさらに酒を振る舞ってくれた。ここには寿蔵主や善基らも來ていた。夜にな

って帰った。

小松掘り

二十一日、晴。伏見莊東山に出て、小松を掘った。田向前参議・長資朝臣・慶寿丸を連れて行った。小松を四く五本掘り取った。帰って、宮家御所東の庭に植えた。

廊御方の部屋で酒を飲んだ。禅啓が世話をしてくれた。先日の三栖の騒動が解決してめでたいたので、村人たちが祝い酒を献上してきたのである。

広橋兼宣はなかば中風らしい

京に出ていた重有朝臣が帰ってきて、世間話を語ってくれた。広橋兼宣納言は八幡宮で発病したが、いまだ治らないそうだ。半ば中風ちゅうふうのような容体らしい。

二十二日、晴。豊原郷秋が來たので、音楽会をした。採桑老・蘇合三帖・蘇合三帖破急・万秋楽破・白柱・輪台・青海波・千秋楽などを演奏した。

松茸の初物

松茸の初物がもたらされたので、味わった。

二十三日、晴れていたが、夕方、雨が降った。また山に行き、小松を掘った。田向前参議と重有朝臣を連れて行った。帰って、東の庭に小松を植えた。

陰陽師の賀茂在方

さて私が留守の間、陰陽師の賀茂在方朝臣が來たそうだ。私が留守だと言ったら、廊御方が対面して、少し酒を飲ませたという。賀茂在方ははじめて來たので、私は会ったことがない。残念だ。

賀茂在方はその後、この付近を遊覧していったそうだ。子息の在貞ら大勢を連れて寺庵などを巡り歩いたらしい。

二十四日、晴。こちらから希望して大光明寺の風呂に入れてもらった。夜に松崖がいらっしやって、酒宴を開いた。先日、禅照庵に來てくれたお

礼だという。

栗打ちで遊ぶ

今日も栗打ちで遊んだ。宮家の女性たちや男ども、それに寿蔵主も一緒に遊んだ。

琵琶の名器「虎」と「卯の花」を修理する

二十七日、晴。琵琶の虎と卯の花が少し壊れたので、修理をした。琵琶専門の細工師がこの辺りにはないので、琵琶については素人の細工師に依頼した。

門などを修理するため、伏見荘に臨時段銭を課税する

二十九日、晴。先日の大風で門などが吹き破られた。それを修理するため、伏見荘に臨時の段銭（※）を課税することを村人たちに伝えるよう、事務担当者に命じた。

※段銭（たんせん）：土地の面積ごとに課する租税。

三十日、晴。段銭は五ヶ加納にも課税することにした。領地の管理者である綾小路信俊前参議や冷泉永基朝臣も皆、課税に同意した。

綾小路家の女性がみた夢

ところで、綾小路前参議が書状を送ってきた。綾小路の娘であろうか、家の女性が去る二十一日の明け方に見た夢を、一枚の紙に書いて知らせてきた。私が今出川家に寄宿していた時、同家の敷地内にある小さな神社に願い事をしたことがあった。その願いがまだ果たされていないことを伏見殿へ急いで申し入れなさいという内容の夢だったそうだ。

かつて貞成が小さな社に祈願したことは実際にあった

この祈願の内容は忘れてしまつて、まったく思い出せない。しかし私とその神様に願い事をしたというのは、実際にあったことである。私の出処進退が困難な局面にあった時に、願い事をした。今となつては詳しいことは忘れてしまつたが、私の進退がさわまつていたことは事実である。不思議な夢だ。

神慮は恐るべし

その時の願いは既に果たし遂げられましたと急いで返事をした。不思議な夢見だが、神様の思し召しというものは恐ろしい限りである。

帝釈天が動いて地震が起きた

孟冬（十月）朔、空は晴れている。「めでたい兆しがあり、とても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。今夜の午前一時に地震があった。帝釈天が動いたようだ。

遊山の月見岡でイグチを採る

夕方、遊山に出かけた。姪の鳴滝殿・私の娘・上臈・二条殿・今参・重有朝臣・慶寿丸も一緒だった。月見岡でイグチ茸を採った。

三日、晴。いつものように亥子餅を食べた。

四日、雨が降った。鳴滝殿がお寺に帰った。御引き出物として練貫の反物一つとお土産の酒樽などを進上した。

大光明寺蔵光庵が松茸を進上してきた。すぐに味わった。

伏見荘の地侍たち一同が段銭賦課に異議を申し立てる

十一日、晴。御所の修理は来たる十六日と決まった。そうしたら伏見荘に段銭をかけるのを止めてほしいと地侍たち一同が歎願に來た。幕府から賦課されるのはしかたがないが、莊園領主の領家から賦課されるのはほとんど先例がないという。そのため段銭を負担するのは難しいというのだ。既に決まった後に異議を申し立てるのは失礼の至りでよろしくない。それで、厳しく重ねて段銭を負担するように命じた。

田向長資の妻が男子を出産する

長資朝臣の妻が今日、出産した。安産だったそうだ。生まれたのは男の子だという。田向家ではきつと喜んでることだろう。

十四日、晴。大光明寺の風呂に入った。このところ、光台寺の風呂は壊れてしまっているのだ。

段銭賦課の件で地侍たちが伏見荘政所小川禅啓を糾弾する

十五日、雨が降った。亥子なので、いつものように亥子餅を食べた。深夜になって、田向経良前参議と政所役の小川禅啓が来た。段銭の賦課をめぐって、伏見荘の地侍四〜五人が禅啓を糾弾しに来たそうだ。それで禅啓はとても驚いたという。そのため夜中にもかかわらず、やって来たという。

伏見荘村人全員が段銭に反対している

段銭の賦課には伏見荘村人全員が納得していない。それなのに禅啓が軽率にも領主からの命令に応じたのがよろしくないという。これ以上詳しいことは、ここに記すには及ばない。

貞成、禅啓糾弾の首謀者を調べるよう命じる

十六日、晴。村人たちが禅啓を糾弾するのは間違っているので、誰がそのような発言をしているのか、伏見荘の事務取扱者に調査するよう命じた。今日、冷泉正永が和歌百首を詠んで懐紙に書いて送ってきた。早速の詠進で、神妙なことだ。

禅啓糾弾の首謀者である芝俊阿と国宥を処分する

十七日、晴。禅啓糾弾の首謀者を調べさせたところ、芝俊阿と国宥らが主導しているという。それで俊阿は譴責処分にした。国宥は官家への出仕停止を命じた。これ以上詳しいことは、ここに書くことはできない。二十日、晴。田向前参議が京に出かけた。これは、三栖との境界争いで、將軍が担当事務官を別人に交替させたことによる。新たな担当の事務官を松田主計允にするのご命令がでたので、松田にそのことを確認するために出かけたのである。

妻の二条殿は、北野天満宮のお経供養に参列するため出かけた。

二十一日、晴。田向前参議が帰ってきた。松田と会って詳しく打ち合わせをしてきた。訴訟書類の原本をいただければ、それを將軍にお見せしますと松田は言っていたそうだ。

伏見荘に段銭を賦課したことに対して地侍たちが異議を申し立てているのは、よくないことだ。それで、重ねて命令書を出して村人たちへ厳しく命じるよう、事務担当者に指示した。

今年土倉役で済ますよう、地侍たち一同が提案する

二十二日、晴。今年、段銭を賦課すれば、伏見荘は荒廃するので、来年なら必ず負担するので繰り延べてほしいと、村人たちから申し入れがあった。今年はとりあえず荘内の二つの土倉に土倉役を懸けてほしいと、地侍たちが全員で言ってきた。このことを二つの土倉に命令するよう、事務担当者に指令した。

若狭国松永荘・近江国塩津荘・今西荘へ段銭を課す

二十三日、晴。祐誉僧都が来た。若狭国松永荘と近江国塩津・今西両荘への段銭賦課を命じた。祐誉僧都は現地へ急ぎ命令しますと言った。少し酒を飲んだ後、祐誉はすぐに出ていった。

備中国大島保など諸々の領地に段銭を課す

備中国大島保にも段銭(※)を賦課するよう、町経時朝臣に命じた。しかし先例がないと現地の代官が命令に従わないそうだ。

私が支配している、あちこちの領地に段銭(※)を課した。御所の修理、それに十一月の父・大通院の御七回忌であれやこれや出費が重なっている、経費の確保が大事なのである。

※「段銭」：原文ではいずれも「天役」と表現されている。今回の臨時課税が正当であることを示したい気持ちの表れであろうか。

二十四日、晴。朝早く明元が来た。明後日、惣得庵へお出で下さいと庵主が招待しているという。特に支障が無いので参りますと返事した。前庵主が亡くなつてからまだ数日も経っていない。もしかしたら、新庵主のお披露目会(※)に招待されたのかもしれない。

※「新庵主のお披露目会」：原文では「坊主開き」とある。

惣得庵坊主開き

二十六日、晴。惣得庵へ、息子・東御方・廊御方・二条殿を連れて行った。

田向経良の妻子である芝殿とあやも同じく来ていた。あやは、去年から崇賢門院藤原仲子殿に仕えている。それで昨日、院家から田向家へ初めて戻ってきたそうだ。田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・寿蔵主・具侍者・正信らも来た。庵主は丁寧に一献の酒宴を用意してくれた。数杯の盃を傾け、終日にぎやかに過ごした。夕方、官家へ帰った。

二十七日、晴。来年に段銭の納付をするということで、伏見荘の村人たちが承諾したので、二人の土倉が官家の御用に応じることとなった。御修理の目途が立って、めでたいことである。思うところがあつて、官家修理の事務担当を寿蔵主に命じた。

亥子の日なので、いつも通り今夜は亥子餅を食べた。

二十八日、晴。廊御方の部屋で酒を飲んだ。田向前参議と寿蔵主も一緒に飲んだ。今回の政所役糾弾の一件が解決したので、小川禅啓がこの酒宴を用意してくれたのである。

二十九日、晴。田向前参議が京へ出かけた。今晚は京都に泊まりますと手紙を送ってきた。三木の件について侍所から話があるという。明日帰ってから詳しくお話しますとのことだった。どういうことなのだろうか、心配だ。

三十日、晴。夜に田向前参議が帰ってきたが、疲れたので官家には来られないそうだ。三木のこととはびっくりするような話らしい。詳しいことはまだ聞いていない。とても心配だ。

閏十月一日、晴。いつものように月始めのお祝いをした。今日は吉日なので、御所の修理を開始した。寿蔵主が御所修理の事務担当者である。

三木善理が田向経良と小川禅啓を侍所に訴えた

さて田向前参議が言うことには、先年の盗人の件で、三木善理は鬱憤を抱いているという。その鬱憤を晴らすため、田向前参議と小川禅啓を

処罰してもらおう、侍所に訴状を提出したそうだ。そしてそれは將軍の仰せに基づくものだという。

ただしこれに関する將軍の命令書はない。ただ畠山管領の使者がこの訴状を侍所に提出したそうだ。どうもこれは偽りの悪巧みのようだ。とても怪しい。既に四〜五年も前の事を蒸し返して訴訟をするなど、馬鹿らしいにもほどがある。訴状の内容も田向と小川をいろいろと訴えているものなのだが、文章がおかしい。取るに足らないものだ。

二日、晴。昨日と同様、修理が続いている。大工の源内次郎と番匠二人の合計三人で修理をしている。

三木の訴訟は中央の儀

田向前参議が京都に出かけた。三木の訴訟の件を内々に室町殿へ尋ねたところ、ご存じないそうだ。三木が誰か幕府関係者と密談して勝手に言い出した（※）悪巧みであろう。つまらない話だ。

※「誰か幕府関係者と密談して勝手に言い出した」：原文では「中央の儀」とある。

三日、晴。今日も修理工事が同じく続いている。

四日、晴れていたが、夜に雨が降った。今日も修理工事が同じく続いている。少し酒を飲んだ。

五日、晴。今日も修理工事が同じく続いている。

六日、晴。今日も大工による修理が同じく続いている。

播磨国国衙領に段銭を課す

七日、寒い嵐が吹き、初雪が降った。修理は同じく続いている。

さて来月は父・大通院の御七回忌の御仏事なので、その準備で忙しい。播磨国国衙領（※）に段銭（※）を賦課するよう、年貢納入を請け負っている播磨国守護に命じる。この件について室町殿の了解をもらうよう、勧修寺経興中納言へ手紙を送った。

先日、この件を勧修寺と相談した折、「お手紙を私に下されば、室町

殿へお話を通しておきます」と言っていたので、手紙を送ったのである。このような御仏事をする際に、諸々の領地に段銭(※)を課すことは、昔からいろいろと先例がある。このことを手紙に書いた。

※国衙領(こくがりよう)：各国の国府の所領。公領ともいう。室町時代の国衙領は、既に国府が衰退しているので、荘園と同じような私領になっっている。播磨国(兵庫県)の国衙領は、伏見宮家の領地。

※「段銭」：原文では「天役」と表現されている。十月二十三日条を参照のこと。

八日、今日も修理が続いている。ところで、足の股が痛む。もしかしたら脚気だろうか。はつきりとは分からない。

御所の修理が終わる

九日、晴。修理は今日で終わった。東南の塀・細い廊下(※)・門・土塀の屋根などに修理を加えた。寿蔵主がこの修理に関する事務を取り扱ってくれた。無事やり遂げてくれて、神妙である。綾小路信俊前参議や田向経良三位に事務をとらせてもよかったのだが、事情があつて、寿蔵主に命じたのである。

脚気が再発する

さて股の痛みがひどくなってきた。左右の膝も痛い。起居がままならない。珍しいことだ。昔、脚気を数日間患ったことがある。再発したのだろうか。

※「細い廊下」：原文では「釣屋」に「御細所」という割注が付されている。

十一日、晴。脚気がさらにひどくなってきたので、医師の竹田昌著法眼を呼んだ。すぐに来てくれた。脚気で、かつ中風だという。鍼やお灸などの治療をしてくれた。

十二日、晴。病状は変わらない。昌著法眼が三種類の薬を献上してくれた。起居がさらにままならないので、宮家の男女が看病してくれた。宮家の

人たちは私の看病でとても忙しい思いをしていることと思う。

侍所所司代の使者

十四日、晴。夕方、侍所長官補佐の使者が来た。三木盗人事件の処罰のありかたをありのままに起請文(※)に書いて提出してほしいと伏見荘の管理者たちに依頼してきた。

※起請文(きしょうもん)：契約を交わす際などに、約束を破らないことなどを神仏に誓う文書。ここでは嘘偽りなく、当時の処分状況を伝えていることを誓った書類ということになる。

後小松上皇へ蜜柑を贈る

十六日、雨が降った。上皇様へ蜜柑二籠を贈った。すぐにお礼の返事が来た。

十七日、晴。昌著が来た。脈が少し本調子に戻っているとのことだった。脚気も少し良いようだ。良い薬の効能だろう。

三木訴訟の件が解決する

三木の件で、伏見荘の管理者たちが起請文を書いた。田向前参議も花押を書いた。この起請文を侍所長官補佐に渡すため、禅啓が京へ向かった。

後で聞いたことだが、この一件は管領も全く知らなかったようだ。三木の同僚たちがはかった悪巧みらしい。よくないことである。いずれにせよ、無事解決した。

足利義持へ蜜柑を贈る

二十日、雨が降った。室町殿へ蜜柑二籠を贈った。取り次ぎ役の広橋兼宣にも一籠与えた。

脚気の病状は相変わらずだ。起居がままならないので、面倒なことがある。

足利義持が播磨国守護に国衙領への段銭賦課を厳しく命令した。

二十一日、晴。勧修寺経興から書状が来た。播磨国国衙領に段銭(※)を

課す件について、室町殿へお伺いを立てたところ、こちらからも播磨国守護へ命令なされた。それで守護は、段銭の総額五十貫文ということで了解したそうだと。

当初、今年の播磨国は日照りで耐えがたい状況だと守護から返事があったという。しかし室町殿から厳しく命じたところ、段銭の賦課に応じたそうだと。おめでとうございませと勤修寺の書状に書かれてあった。とてもうれしい。

※「段銭」：原文では「天役」と表現されている。十月二十三日条を参照のこと。

六条庁の修理

二十三日、晴。六条庁官の島田益直が来た。このところ、六条殿の御修理を厳しく遂行している。すべての長講堂領に修理経費を分担していただいているとのことだった。広橋兼宣大納言と院の執権である日野有光大納言を事務担当者として、いろいろな人が支配している長講堂領の租税がそれぞれの程度か、調べなさいと益直が命じられたそうだと。それで伏見荘の租税額をお教え下さいと言ってきた。急いで連絡すると返事した。益直は六条庁からのお祝いの酒だということで、特に一献分の銭を持参してきた。神妙なことだ。酒を飲ませたら、すぐに戻っていった。

正永と明盛が来た。今夜から順番で薪を焼く会を始める。今夜は上臈が薪を準備して下さい。

最愛の妻を失い出家した近衛忠嗣の所行は狂気の沙汰だ

さて聞いた話だが、最近、近衛忠嗣前関白の最愛の妻が他界したそうだと。その悲しみに耐えきれず、近衛太閤は切腹しようとしたという。周囲の人々が刀を奪い取って、切腹をやめさせた。しかしその後、自ら本鳥を切り、周囲の反対を押し切って、すぐに出家したそうだと。なんという狂気だろうか。悲しみの余りとはいえ、摂関家の当主としてこのような事をした例は、これまで聞いたことがない。よくないことだ。

初雪の雪見酒

二十六日、初雪が降った。いつものように廊御方と田向前参議が一献の雪見酒を用意してくれた。その後、懐紙一折り分の連歌を行った。参加者は私・田向前参議・重有・長資ら朝臣・正永・善基・行光らである。禅啓も大きな酒瓶である酒海を持参して、連歌会に参加した。

椎野殿がいらつしやうした。このところ、ご病気だったそうだと。養生のため、宮家にいらつしやうしたらしい。順番で薪を焼く会を二条殿が準備した。一日中、一献の酒宴が重なって、皆酔いが廻った。私の脚気は治らず、いまだに辛い。五十韻詠んだところで、中断した。

その後、殿上の間で男どもがまた懐紙一折り分の連歌会を行ったそうだと。

二十七日、晴。正永が帰った。この間、たまたま心静かに仕えてくれた。神妙なことである。

二十八日、晴。伏見荘の租税のことを詳しく調べて、島田益直に書き送った。

霜月（十一月）一日、雨が降った。いつものように月始めのお祝いをした。この朔日が冬至に当たった。朝廷では旬政（※）が行われたそうだと。旬政の執行責任者は二条持基左大臣だということ。

※旬政（じゅんせい）：朝政の一つで、天皇が紫宸殿に出席して政事をみることに。

三日、晴。昌者が良薬を一種類進上してきた。起居がまだ不自由なので、良薬をまた持つてくるように命じた。夜に世尊寺行豊朝臣が来たので、しばらく雑談した。

法安寺に病氣平癒祈願の薬師如来百度参りを命じる

八日、雨が降った。私の病氣平癒を祈るため、法安寺に薬師如来の御百度詣をするように命じた。治った時にはお礼に御千度詣をすると言っておいた。

ところで典侍禪尼が山田にいらつしやつたそうだ。明日、塔頭大通院に焼香されるといふ。その足で宮家にもお出でになるようだ。

典侍禪尼藤原能子の来訪

九日、典侍禪尼殿がいらつしやつた。この五、六年ご無沙汰で、ご出家以後、初めてのご来訪である。珍しいお客人なのでうれい。終日ご滞在で一献のお酒を持参された。数献の酒宴に宮家の男女が大勢参加した。局女の宮内卿を御前へお呼びになつていた。夜になつてお帰りになつた。田向家にも招待されているという。今夜は山田に逗留なさるそうだ。

十一日、晴。典侍禪尼がお帰りになつたようだ。もう一度宮家にいらして下さいとお伝えしたが、急いでいるとのことであつた。もう一度宮家にいらして下さいとお伝えしたが、急いでいるとのことであつた。

順番で薪を焼く会で、いつものように当番の東御方が薪を用意した。十二日、晴。昌耆が来た。脈の状態は良くなつてきているとのことだ。良薬をまた献上してくれた。

栄仁親王七回忌法事を宮家で開始する

さて父・大通院の七回忌御仏事を今夕から始めた。いつものように宮家の男女で軽食を準備する当番を決めた。お経は、松屋・寿蔵主・善基・梵祐・塔頭御寮・香雲庵主・同庵真幸房らが順番に読んでくれることになつた。

十三日、晴。風呂に入った。起居はまだ不自由だが、いろいろと楽になつてきた。それで沐浴したのである。昨日のようにお経を読んだ。また塔頭大通院でも今日から御仏事を開始したそうである。

十四日、晴。惣侍庵主や明元らが酒一樽を持参して来た。廊御方のお部屋で酒を飲んだ。楊柳寺の住職もお茶菓子などを持って来た。

十五日、夕方に雨が降つた。いつものようにお経を読んだ。国衛の段銭(※)がまだ届かないので、御仏事の経費が足りず、費用の遣り繰りがとても大変だ。

世尊寺行豊一家が伏見荘へ転居してくる

ところで今日、世尊寺行豊朝臣が伏見荘へ引っ越してきた。広時の屋敷に間借りするそうだ。妻子も全員連れて来たという。これは先日の石清水八幡宮参詣行列のお供で家計が苦しくなり、京都の屋敷はしばらく人に貸したそうだ(※)。かわいそうなことだ。

※「段銭」：原文では「天役」と表現されている。十月二十三日条を参照のこと。

※「京都の屋敷はしばらく人に貸したそうだ」：原文では「宿所は暫し沽却し、人に預け置くと云々」とある。「沽却」は売ることであるが、この売買は年季売りで、約束した一定期間が過ぎれば売主に物件が戻る契約のことであろう。

十六日、曇。行豊朝臣が来たので、少し酒を飲んだ。行豊はご近所に住んでお仕えますと言つていた。近くに居てくれるのはうれしいものだ。芳徳庵主が酒樽などを献上してきた。

十七日、晴。正永が来た。椎野が軽食などを準備してくれた。椎野は大光明寺での御仏事もお勤めになるそうだ。

十八日、夕方に雨が降つた。朝早く廊御方が軽食を準備してくれた。読経に宮家の男女も参列した。

祐譽僧都が来た。これから二、三日、宮家に詰めて読経するとのことだ。また御仏事料も少々持つて来てくれた。

近江国塩津・今西両荘の荘民は段銭納入を拒否する

ところで近江国塩津・今西両荘への段銭賦課は先例にないということ、現地の荘民たちは命令に絶対従わないと言つていふそうだ。そのお詫びとして、代官の熊谷は両荘の一献分の銭として五貫文を進上してきつたそうだ。それを今日、祐譽が持つて来た。

大光明寺観音懺法

さて夕方に大光明寺へお参りした。今夜は観音懺法の法会があるの

で、それに参列するために行ったのである。椎野・東御方・廊御方・上臈・二条殿・塔頭御寮・山田香雲庵真幸房・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・正永・慶寿丸・祐誉僧都らも参列した。芝殿・行豊朝臣方の女性・惣得庵の尼たち・二人の女官ら大勢も来ていた。

午後七時半に懺法が始まった。導師は徳光院主雲峯西堂、香華の役は大光明寺維那僧衆の垠西堂・用健・松崖・寿蔵主ら十九人である。懺法はすばらしかった。

塔頭大通院に宿泊する

参列し終わって、椎野らは宮家へ帰った。私は塔頭大通院へ泊まることにした。田向前参議らも皆一緒に泊まることとなった。

琵琶法師の城竹検校

深夜に琵琶法師の座頭が来た。今日、私たちが泊まりに来ることが分かって、院主の用健が呼びになったそうさ。すぐに内へ呼び入れた。城存の弟子で城竹検校という琵琶法師だそうさ。仁和寺の寄付集めで平曲の興行があった時、三人の琵琶法師が平家物語を語った。城竹はその一人だったそうさ。平家物語を五句語った。すばらしい声だった。平家語りが終わってから、すぐに眠った。

十九日、雨が降った。朝早く軽食をとった。田向前参議らも皆食べた。僧衆は地藏殿で軽食を食べた。軽食以前にまずお経を読んだ。軽食が終わって、雲峯西堂・垠西堂らと初めて対面した。その後、城竹が客殿で平家物語を三句語った。椎野や宮家の女性たちも大光明寺へ来た。

午前十一時から一時間、お経を読んだ。まず長老がお香をたいた。以前から、長老にこの役をするよう命じておいたのである。所作はすばらしかった。次に僧衆や修行僧・稚児ら五十一人でお経を読んだ。読経が終わってから、僧衆は食事をとった。私や宮家の男どもは、大光明寺の出費になるので、食事はとらなかつた。男ども面々は、この措置に不服そうだった。僧衆が食事をしている間、ご位牌に焼香した。椎野・宮家

の女性たち・侍臣らも同じく焼香した。その後、長老・二人の西堂・退蔵庵主らと対面して、すぐに座を立った。私や椎野たちは宮家へ帰った。無事に法事が終わってめでたいことである。

大光明寺へは錢三十三貫文を納めた。この費用で今日の読経や昨日の懺法を行ったのである。播磨国国衙領の段錢（※）はほとんど収納した。まだ未納額があるので、急いで収納しなければならない。

大光明寺での御仏事は今日で終わる。第七回忌に相当する本年に塔頭・大通院を建立することができた。ご自身の御塔頭で御仏事を執り行うことができたことは、父の長年の願い通りであることは明らかだ。とても喜ばしいことである。

※「段錢」：原文では「天役」と表現されている。十月二十三日条を参照のこと。

栄仁親王祥月命日の御仏事

二十日、晴。早朝に軽食をとった。招待した僧は用健・即成院主梵基・田向経良の息子である瑛侍者・珠侍者・惣得庵主・惣得庵明元・稚児の洪得・稚児の本玖、この他に軽食を差し上げる方々は松崖・寿蔵主・善基・塔頭御寮・経良の妹である玄経・香雲庵主・山田香雲庵真幸・稚児の梵祐らである。軽食をお相伴する俗人は田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・祐誉僧都・正永らである。僧衆と男性たちは道場で軽食を食べる。私・椎野・女性たち・比丘尼たちは常の御所で食べる。殿上の間を今日の読経の事務所とした。主な村人たちは常の御所で食べる。身分の高い者低い者かれこれ百人余りになる。寿蔵主と広時の両人が執行責任者となった。軽食の後、一時間お経を読んだ。そして前と同じように食事をとった。

生島明盛を御霊供の奉行に任命する

さて生島明盛が御霊供の事務取扱をしたいというので、任命してやった。雑役係の法師が事務取扱者をした先例もある。最近では寿蔵主が事務

取扱者であったが、ほとんど仕事を果たさなかった。これでは先例に背くと明盛が訴えてきた。明盛が言うことは道理なので、彼を任命したのである。

諸寺庵での御仏事料を施入する

今日、光台寺法華経分担写経の一部を書写した。その他、寺庵で行った御仏事の費用を型通り納入した。それは、椎野の浄金剛院・法安寺・光台寺・惣得庵・香雲庵・楊柳寺・蒼玉庵・芳徳庵などである。播磨国国衙領段銭（※）五十貫文の半分で、寺庵などの御仏事料をまかなった。国衙領段銭の未納分を催促しているが、まだ納入されていない。それで遣り繰りが大変になっている。

書写が終わって、光台寺の風呂に入った。この風呂は、重有朝臣が御仏事として風呂焚きの費用を負担したものである。綾小路前参議や隆富朝臣からも御仏事料少々が届けられた。兩人は病気だということで伏見に来ていないのが残念である。正永・祐蒼が帰っていった。御仏事は無事終了した。良くやり遂げたと自分を褒めてあげたい。脚気も良くなった。これも寺にお参りしたおかげであろう。喜ばしいことだ。

上皇御所の泉殿を移築する

ところで聞いたところによると、上皇御所の新築の御会所である泉殿を移築したそうだ。この前から移築作業に入っていた。これは室町殿が準備なさったことだという。

足利義量が初めて石清水八幡宮に参詣する

また今日は足利義量殿（※）が石清水八幡宮へお参りした。初めての参詣なので、行列は華やかに飾られたそうだ。六条左女牛若宮や北野天満宮にも同じくお参りしたそうだ。

※「段銭」：原文では「天役」と表現されている。十月二十三日条を参照のこと。

※「足利義量殿」：原文では「將軍」とある。ただ足利義持がはじめて石

清水八幡宮を参詣したとは考えられないので、これは子の義量のことと思われる。ただし義量が將軍宣下を受けるのは翌応永三十年三月十八日のことである。

精進解きの御魚味

二十一日、晴。播磨国国衙領段銭（※）納入の祝い酒として特に一献の酒宴を行った。また禅啓が精進落として魚等を進上してきた。順番で薪を焼く会、当番の廊御方が薪を準備した。一献の酒宴が重なった。

※「段銭」：原文では「天役」と表現されている。十月二十三日条を参照のこと。この日、未納額も納入されたか。

琵琶法師の妙一座頭

二十五日、一日中、雪が降ったが、夜には雨となった。順番で薪を焼く会、いつものように当番の重有朝臣が薪を準備した。琵琶法師の妙一座頭が来た。平家物語を二〜三句語った。田向前参議や行豊朝臣と一緒に聞いた。

二十六日、晴。上皇御所御会所ご移転のお祝い状を冷泉永基朝臣を通して書き送った。即成院から一献の酒を院主の梵基と善基らが持参してきた。毎年恒例のことであり、神妙だ。

二十七日、晴。松崖が一編の漢詩を送ってきた。

暮寒山欲雪 覓句座清閑 想看禁宮夕 举盃春満顔

貞成の狂句

二十八日、夜から寒い嵐となった。大雪が降った。その雪景色は甚だ趣がある。昨日の漢詩に、狂句で応えた。その狂句を松崖に送った。

吹雪頻寒籟 料知宮裏閑 無盃入寂寞 火氣自紅顔

雪消しの酒

寿蔵主が雪消し（※）として酒を準備した。その後、行豊朝臣が順番で薪を焼く会の用意をした。行豊は順番で薪を焼く会の当番には入っていないが、近くに引越してきたので、準備してくれたのである。神妙

なことだ。一献が重なった。とても面白かった。

夜に和漢連句を懐紙一折り分行った。私・権野・松崖・重有・長資朝臣が参加した。ただ一折りだけ詠んでやめた。

※雪消し（ゆきけし）：本来は、雪が多く降るとき、果物などを贈答したこと。ここでは後文に「一献が重なった」とあるように、寿蔵主が雪見酒を提供したのであろう。

十二月一日、晴。「冬の終わりでもともうれしい（※）。とても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。

田向経良、領地の山城国大野荘に滞在する

ところで明日、田向前参議は領地である山城国大野荘に向かうそう
だ。十日余り現地に滞在しますと暇乞いをしてきた。それで今夜、饞に
型通りの祝宴一献を開いた。そして宮家の女性たちがさらに酒を持ち寄
つて、経良に対する日頃からのお礼の気持ちを表した。

※「冬の終わりでもともうれしい」：原文では「三冬万悦」とある。三冬
（さんとう）とは初冬・仲冬・晩冬、冬の十・十一月三ヶ月のこと。

二日、晴。朝早く田向経良は田舎に下っていった。ところで今日から等持
寺法華八講が始まる。これは宝篋院殿足利義詮左大臣の仏事である。こ
のところこの法華八講は中絶していたが、今回、再興されたそうだ。

貞成三女の髪置きを行う

三日、私の三女の御髪置き儀式を行い、お祝いをした。芝殿が諸役を勤め
てくれた。通常通り、特別に三献の祝宴をした。数日前に陰陽師の賀茂
在方朝臣に髪置きの日時を占わせておいた。

称光天皇の御湯始め

長資朝臣が朝廷の小番を勤めに行った。天皇陛下は今日、ご病気にな
ってからはじめて湯浴みをされるそうだ。

四日、晴。長資朝臣が帰ってきた。称光天皇陛下の御湯始めについて話を
してくれた。御湯始めのお祝いとして室町殿から御馬と太刀が献上され

たという。また関白以下諸家や諸門跡からも御馬やその代銭が献上され
た。公卿たちがお祝いに参上した。

医師の寿阿に莫大な重宝が与えられる

士仏法印の弟子である医師の寿阿がずっと天皇陛下の治療にあたっ
てきた。その寿阿にご褒美として重宝が与えられた。食籠一つ・金欄の
袋に入れられてお盆に載っている香箱・同じくお盆に据えられた青銅製
の香炉一つ・金造りの太刀一腰・御馬・銭など、諸方から朝廷に献上さ
れた進物をすべて寿阿がいただいたそうだ。殿上に控えていた長資朝臣
がその重宝を見てびっくりしたそうだ。

寿阿は名医にあらず

多くの医者が見捨てたのに、寿阿一人が最後まで治療にあたった。そ
れで治したのだから、名誉なことである。すべてが幸運なことだったと
いえよう。ただし寿阿は少しも名医などではない。不思議な運の良さとい
えよう。

五日、晴。お湯始めを迎えることができておめでとうございますと、勾当
内侍を通してお祝いの手紙を天皇陛下にお送りした。今回初めて、この
新任の勾当内侍に手紙を託したのである。上皇様へも同じくお祝いの手
紙をお送りした。

等持寺法華八講欠席の公卿は足利義持の御意に背く者

六日、晴。今日が、足利義詮殿追善の等持寺法華八講の最終日である。行
豊朝臣が布施を渡す役を勤めた。同じ役を勤めたのは公卿十四人、殿上
人十九人だそうだ。公卿で出席しなかった者は室町殿の御意に背いた者
とみなされるという。厳しい処分といえよう。

さて来たる十日は、私の亡母・西御方三条治子殿の二十五周忌である。
それで今日からお経を読み始めた。

七日、晴。惣得庵明元比丘尼が大きな酒の甕である酒海を持参してきた。
思いがけないお心遣いであった。

八日、晴。大光明寺にお願いして風呂に入った。椎野・松崖・重有・長資・行豊朝臣・慶寿丸・寿蔵主らも一緒に入った。

当主が留守の田向家で酒盛りをする

九日、雨が降った。雨には雪が交じっていた。寒気がすごい。惣得庵主理勝が田向家に来た。当主の留守番をしようということ(※)で、酒盛りをした。その後、重有・長資・行豊朝臣らも酒を持って来た。皆が酔い、すぐに歌ったり舞ったりした。とても酔っ払った。皆、その場で反吐を吐いた(※)。面白かった。

明日の母の命日に向けて一生懸命お経を読んでいたところ、酒盛りをすることになってしまった。良いことをするにはとかく妨げが多いものであるなあ。

※「当主の留守番をしようということ」：原文は「留守のこと張行すと云々」。当主の田向経良は山城国大野荘に滞在しており、留守。

※「皆、その場で反吐を吐いた」：原文には「面々、当座の会に及ぶ」とある。桜井英治「宴会と権力」(『宴の中世』、高志書院、二〇〇八年)を参照のこと。

亡母・西御方三条治子殿の二十五周忌

十日、晴。宝蔵院で亡き母の法事を営んだ。用健・松崖・寿蔵主・具侍者・善基・稚児の梵祐・尼たちを招待した。いつものように一時間、読経した。時間をかけて写経した法華経一部を供養した。いつものように形だけの小さな功德を母に手向けて、追慕の気持ちを示した。今回もまた、寿蔵主が法事の事務を取り扱ってくれた。これは、亡母の二十五年忌であった。

十二日、豊原郷秋が来た。取り乱しているの、対面しなかった。

十三日、雨が時々降った。御香宮・法安寺に参詣した。今回の脚気が治ったから、初めての参詣である。法安寺で酒を飲んだ。しばらくして宮家へ戻った。

田向前参議が今日の夕方、田舎から戻ったそうだった。ただし疲れているので、今日は宮家へ参上しないとのことだった。

宮家女房の今参十一歳がはじめてお齒黒を付けた

さて庭田重有朝臣の娘である今参は十一歳になった。それで今日、お齒黒を初めて付けた。特にそのお祝いの酒を献上してきた。それで酒を飲んだ。

陰陽師の賀茂在方朝臣が来年の暦と八卦占いの本などを進上してきた。先だって位階が上がったそうだった。

十四日、晴。田向前参議が田舎のお土産を持参してきた。酒を飲んだ。無事戻ってきたのは、めでたいことである。

智恩院隆秀僧正が来た。この一二年の間、宮家へは来ていなかった。珍しくやって来て、一献の酒を持参した。しばらくおり、夕方に戻っていった。

その後、順番で薪を焼く会を田向前参議が準備した。また連歌会もあった。田向前参議の幹事役をこの二ヶ月の間、免除していたのだ。椎野が明日寺へ帰るといので、急遽、準備させた。薪の会にしろ連歌会にしろ、椎野が帰る直前のちょうど良い時機に開くことができた。参加者はいつもの者たちである。行豊朝臣・稚児の洪得も参加した。深夜に百韻が終わった。いい忘年会になったといえよう。

十五日、晴。椎野が寺へ帰った。数日、宮家にご滞在だった。僧侶であるのだから、年末にお寺へ戻るのが当然の事であろう。

勤修寺経興中納言に連絡することがあったので、庭田重有がその使者として出かけていった。

南禅寺で殺人事件がおこる

さて後で聞いたことだが、南禅寺の寮で争いがあった、僧が殺害されたそうだった。將軍から侍所にご命令が出て、南禅寺の僧四十八人が逮捕された。寺中にある武器を捜して侍所が押収したという。

十六日、曇。京都市内には雪が降ったそう。庭田重有が帰ってきた。今朝、勧修寺と対面して、いろいろと申し含めてきたそう。勧修寺は問題ありませんと答えたという。

節分なので方違えをする

今夜は節分である。方違えとして廊御方のお部屋に移動して、夜明けに自室へ戻った。その間、特に一献の酒宴をした。田向前参議らも参加した。

後小松上皇、方違えで突然安楽光院へ行幸する

聞くところによると、後小松上皇様も御方違えで一条辺りに御牛車をお立てになつていたそう。ところが急に安楽光院へお立ち寄りになり、寺中をご覧になつたという。安楽光院では思いがけないことなので、びつくり仰天したそう。遅い時間に門を開けさせようと、お供の人たちが大声で門を叩いた。それには長老も仰天したという。

十七日、晴。「立春の佳い時節で、めでたい兆しがある。すべての事においてとても幸せだ」と予祝した。御強飯を供えて、いつものようにお祝した。田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸もお祝いに参加した。年内に早速、立春となり、めでたいが、ただ慌ただしかった。

朔旦冬至なので叙位を行う

十八日、晴。十一月一日が冬至に当たるといふはめでたいことなので、朝廷では今日、叙位を行った。執筆役は二条持基左大臣だそう。十九日、雨が降った。陰陽師の土御門有盛朝臣と同有清が来年の暦や八卦占いの本を献上してきた。

ところで脚気が治って以後、初めて琵琶を弾いた。妙音天に万秋楽を奉納した。

二十日、晴。塔頭大通院へ行き、焼香した。東御方・廊御方も同じくお参りした。重有朝臣一人だけをお供に連れて行った。

伏見莊藤井の湯屋の辺りが火事になる

帰ろうとしたところ、火事があった。大光明寺近所の藤井の湯屋あたりが焼けたようだ。ただ家が軒焼けただけで、湯屋は無事だった。小さな家々が壁を接して建っているのに、一軒焼けただけで他は無事だったというのは、奇跡的なことである。鎮火してから、宮家に帰った。

二十一日、晴。中原諸勝大外記が朔旦冬至叙位の記録を送ってきた。位を授けられた人々は大勢いた。

聞くところによると、室町殿は今日から五壇法の法会を執行されるそう。うだ。

二十二日、曇。明後日、松崖が休暇を終えて天龍寺に戻るといふので、饞はなむしとして夜に酒宴をした。重有・長資朝臣が参加した。村人の広時・有善・広輔を御前に呼んだ。歌ったり舞ったり、楽しかった。

二十三日、晴。聞くところによると、室町殿が主催している五壇法の導師、中央の壇は岡崎僧正恒教、脇の壇は十相院主・三宝院主・随心院主・花頂僧正だそう。灯火を持つ役の殿上人は、山科教豊朝臣・白川雅兼朝臣・飛鳥井雅永朝臣・世尊寺行豊朝臣・冷泉為之朝臣だといふ。着座の公卿は省略なさつたそう。行豊朝臣は毎日参列しているといふ。

琵琶法師の城義勾当

琵琶法師の城義勾当が来た。慌ただしなので、明春に来るよう命じたら、すぐに出て行った。夜に順番で薪を焼く会をいつものように長資朝臣が準備した。

梵祐喝食が得度する

稚児の梵祐は、今日出家するそう。

松崖、天龍寺に戻る

二十四日、晴。松崖が天龍寺に戻った。当年はほぼ一年中、伏見に滞在していた。よろしくない事である。ようやくお寺に帰ることになり、とてもめでたい。

少年僧となった梵祐

二十五日、雨が降った。少年僧となった梵祐、出家した姿を見せに来た。将来は即成院主になりたいというので、その器量になれるよう心より願った。梵祐が特別に祝い酒を持参してきた。即成院善基もいたし、田向前参議らも一緒に祝宴を開いた。

二十六日、晴。町経時朝臣が来た。少しの間対面して、酒を与えたら、帰っていった。

北山惣社神楽

聞くところによると、今日は北山惣社の御神楽だそうだ。綾小路信俊前参議は御神楽に参列しますと言ってきた。

二十七日、雨が降った。いつものように煤払いをした。節分以後初めての煤払いなので(※)、特に入念に払った。煤払いの後、いつものようにお祝いをした。そして風呂に入った。年末なので、身を浄めたのである。上皇様へ年末のお札状をお送りした。室町殿へのお札状は、勧修寺経興中納言を通してお送りした。今夜は朝廷で内侍所御神楽だそうだ。

土岐持益と京極高数の座席争い

さて管領による将軍家貢馬揃えの際、土岐持益と京極高数が座席の上下をめぐって言い争いになったそうだ。

※「節分以後」…原文は「節分以前」とある。以後の誤記であろう。

二十八日、晴。隆富朝臣が来て、一時間ほど滞在して、すぐに出ていった。用健がいらっしゃった。

二十九日、晴。今日で暦を巻き尽くした。忙しく慌ただしいだけの一年だった。綾小路信俊卿が来た。自他共に慌ただしいこの日にわざわざ来てくれて、とてもうれしかった。それで酒を飲ませたら、すぐに帰っていった。大光明寺長老以下の面々も来たので、いつものように対面した。

除夜のお祝いに田向前参議以下、行豊朝臣らも同席した。明春の吉慶を念じて、「すべての事がめでたい」と予祝した。

宮家の雑事や日本国中のうわさ話などを詳しく記録した。後の者がこの記録を見るのは、差し障りがある。ゆめゆめ他家の者に見せてはならない。

(続)